

新しい薬学をめざして

Vol.42 No.3
2013.4.1

発行 新薬学研究者技術者集団

〒555-0024 大阪市西淀川区野里3丁目6-8 E-mail shin-yakugaku@tea.ocn.ne.jp.
(有)大阪ファルマプラン・あおぞら薬局 気付 郵便振替口座 01090-8-16463
TEL 06-6477-8080 (担当 稲垣) FAX 06-6477-8082 URL <http://pha.jp/shin-yakugaku/>



福島の間 (その3)

早期除染をして少しでも安心な住める街と帰れる家に

佐藤政男

忘れないで欲しい

福島は復興どころか復旧もままならない。多くの方は「忘れ去られているのではないかと怖れているようである。そして一刻も早く帰りたい、安心した気持ちで生活したいと感じている。しかし、2年目の3.11を前に実施されているアンケートでは、帰還の見通しのたない浪江町では、57%の住民が「帰らない・判断できない(安全性、仕事、生活、健康面から帰れない)」と答え、悩んでおられる方が多い。「放射線量、原発の安全性、医療環境への不安」を挙げている。また、避難対象になっていないが放射能の高い私が住む福島市の渡利地区では、健康不安を感じながら早く安心したい気持ちが強い。いずれも速やかに徹底的な除染をして少しでも安心な住み家にし、他市町村へ避難されておられる方が帰る気持ちになってもらいたいと願っている状況である。汚染度の違いによって状況を的確にとらえ、その状況に応じての対応が急がれるというのが実感である。心配される他県の方が、危険性だけを大きな声で言う「福島県はこわい所」という風評に走る国民もいて、結婚できないと悩む女子中・高校生、若い女性もいるし、安全性の強調はこれまでの情報の出し方から、本当に大丈夫なのかと悩み、不信感をつのらせる住民も多い。

そんななかでは「いろいろな情報にだまされずに、過大評価、過少評価しないで一步一步状況改善に力を尽くすことが大事」である。これは初めて聞く機会があった、福島県の二本松市に幼少時疎開された安斉育郎先生のお話です。現時点では、①何よりも現実に生活している人々が少しでも安全・安心していける内容を最大限追求すること、②脱原発に向かって決意を固め、国の政策として踏み出していくかという全体的な課題が大事と強く思えた講演だった。

目次

□福島の間 (その3)	佐藤政男…………… 47	□ミニゼミ:「医薬分業」は国民に役立っているか	
□やっぱり大事 食品衛生監視員のしごと (3)		寺岡章雄…………… 60	
	佐々僚己…………… 50	□今日も明日も日曜日 (26)	三原啓子…………… 65
□ミニゼミ:アスベスト禍	三原啓子…………… 52	□第9回運営委員会報告	…………… 66
		□13年度総会とシンポジウム (予告)	…………… 66